雜錄

影と聲

上村とほる

義士と學生團

華奢風流の元祿時代に赤穗の小藩が誠忠日月を貫く四十七人の義士を出したることは抑も偶然ではなかつた。內匠頭長矩の祖父長直の明君であつたことゝ、當時海內第一の英傑山鹿素行を侯が前後二度に涉り賓師の禮を以て惹着けたことが遠因をなしてゐる。此の大豪傑が十九年間程赤穗に在つて、自個の兵法と經學とを以て一藩の士人を鼓舞作興した。而して素行は去るに臨み衷心長直の好誼を謝し『殿には素行が頑愚を捨てさせられず國士を以て待たせられたる御恩の程は報い奉りやうもおはさぬ。但し責めては萬分の一の御奉公にもと、日頃から聊か心をこめて御家臣の敎育を力め置きましたれば、將來萬一緩急の場合など生じ申さば、思し當らせられる節もおはさう歟』といつた。偉人の薰陶は彼が豫言を適中せしめた。

日本醫學專門學校は心理學者として有名なる高島平三郎氏が倫理學を擔任して居つた。然るに學監にして理事なる、且事實學校經營者なる磯部檢三氏が學生に對する處置の誠意を缺きし爲め古今未曾有の學校騷動を惹起して滿天下に其の醜名を曝した。人を育英するものゝ何ぞ夫れ難きやである。

義徒の信條は『君父の仇は共に天を戴かず』『萬山不重君恩重。一髮不輕我命輕』で盡きる。主家の兇變は大なる悲劇で、彼等の運命も亦悲劇で一貫する。吾々學生團の立脚地は『不義を惡む』と雖も、單に磯部某なるものゝ奸譎と、欺謾に依りて受けたる災害復酬のみではない。吾々は僞敎育者の下を去りて、淨土により大きく生きんとするにある。夏目漱石先生が『墓場までが喜劇で、墓場から先が悲劇である』と云はれた。赤穗浪士はその的とするところは仇の首級であつた。復讐が凡であつた。其の延引するのを憤慨して本所林町に

借宅を構へ、號して長江長左衛門と稱し、鋭意上野介の動作を伺つた堀部安兵衛の如きは、復讐專門家の過激黨であつた。爛熟せる文明の結果は遂に歐洲の戰禍を生み、國家百年の計を立つるに最も困難なる秋に際し、吾々は單に欺謾者を憎み彼が自滅を以て快を叫び、吾が事足れりと爲すものであろうか。又新たなる學校によりて救濟され、新校設立の曙光見ゆなどの言によりて安心の笑を洩らすものであろうか。義士と學生團とは、原より比ぶべくもないが、根本より差異のあるのを認めなければならぬ。高橋先生の言はれた悲劇と喜劇とは、尙春秋に富む吾人青年の、墓場に行くまでに爲すべきことが數へ切れない、半歲の奮鬪を忘れずば當時の緊張せる心を以て學生の意氣を續けられんことを望まれたのであろうと思はれる。卽ち義士は死を前提とし、吾人は生を前提とする愚案ずるに義士の眞面目は討入の刹那に非ずやがて細川、松平、毛利、水野の四家へ御預けになり翌年二月四日切腹の當日まで、飽くまで彼等が面目を保持して傷つけなかつた行動にあろうと思ふ

曠世の烈士が英魂碧落に歸して萬世に名を揚ぐ我等は生きて耻を天下に殘すことなくんば幸であろう。若し我等が舉の正と義に立てりと自覺せるならば、君國に身を殉せし義徒の終始一貫せる壯擧に感奮興起する處なくして可ならんやである。

醜類一束

四十七の義士を出せる赤穗浪士も亦七十四の醜夫を出した。初めより義盟に入らざる者はもとより論外だが、一度署名血判して事　困難なるを察し逃れ去つたものが義士の數を顚倒して、義なく耻なき七十四醜夫を出したのは奇なる對照である

神崎與五郎が草した『憤論』の一節に

『彼等奴輩が一時義盟に就きたるは、偏に亡君の貴弟世に出でらるゝとの浮說ありしに依りてなり。赤穗にありて世々君祿を食みながら、侯家の滅亡に會し不善を爲す者山の如く潮の如しと雖も是等は固より論ずるに足らず。當初よりして義盟の員數に入らざりしものは是れ頑弱の徒なるのみ既に一たび之に入り、略同志の消息を知り、而る後ち逃れたる者に至りては、罪惡實に前者に倍せ

り。彼等蹈天蹐地すと雖も、宇宙の神靈豈之を宥し給はんや。天下後世其れ之を思ひ、其れ之を戒めよや』（福本先生意譯）と言つた。

日本醫專より總退學を決行せる際一時加盟しながら、九月尙前途暗膽たる時に當り、背盟破約せる背德者も丁度之に似てゐる。

横川勘平の書中にも

『去夏籠城之覺悟の節、臆病を働き、先非を悔ひ、大學殿善惡を窺ひ、樣々申分いたし、テダテを以て山科內藏助へ參り、首を下げ手を束ね、同志の人數に入り、又今度之首尾を恐れ、すみやかに逃る大臆病者……奥野將監、河村傳兵衛、此兩人申は、いかに人か犬と申しても、死はかなしふ候間、得下り申さずと斷申す。笑止かな〳〵』

と嘲けつた。彼等醜類の末路は何れも悲慘なものであつた。學生團の團結に多大の障害を與へた彼の敗德者流は如何なるものであろう。一年半年早く成業せりとて、永く不義の人となり友を失ひ世を狹くす、殘生の憂苦、懊惱、悔恨、慙愧は自ら招いだとは云へ、憐むべき輩ではないか。

ストライキ人國記

五月一日大町桂月先生の所謂模範ストライキを擧行してから、尤も痛切に感じたのは『國亂れて忠臣表はれ、家貧にして孝子出ず』の言葉であつた。平日談笑の間或は敎場にてノートに忙しき時は同じく平凡の人として相互してゐる。然るに一度非常時に際しては各自の隱れたる鋭鋒が隨所に表はれ、所謂『不逢盤根錯節。不知利器』で人材が群出する。余は此の紛擾の時、明治維新の大業が重に薩長土の人々に仍つて爲された事を思ひ出したそれは半歲に涉る奮鬪中花形役者を勤めたのは多くは其の地方の人々である。長州よりは山根磯部の兩氏を出したるが、學生よりは村上忠愛君の如き熱血兒を出してゐる。土州は喋舌家の多い所であるが、德島縣からは辯論の勇者として緒方、尾形の二君を出した。然し關基の如き異分子の出たのは遺憾であつた。鹿兒島縣には善惡二樣の氣質がある。然し鄕黨心の强い所なので迫田君に殉じて步調を一にし、佐多君の如き遊擊の士を待たのは學生團の幸福であつた。

九州は概して人物が多い樣である。宮崎縣の小庄次郎、武田光麿、長崎縣の中村丈夫、柴田萬吉大分縣には波久津　重石の如き。玄洋社を以て名の高い福岡縣は、有名なる先輩に富むと共に、三輪、上野兩君やその他を出してゐる。中國地方は概して奮はない。中央に集まつてる學生の中で、言葉に訛りのあるのは山陰山陽四國の人々である東北は元來ズーズー辨の本場で發音に聞き苦しい所があるが、それでも強いて標準語を操れない事もない。中國の人は平氣である。それ丈け反感を受け易い。然し廣島縣の渡邊君や長君、岡山縣の山本君、島根縣の後藤吉勇君などは特記すべき人達であろう。

關西人は一番イヤな氣風を有してゐる。敢て渦中に入ろうともせず、傍觀者と云ふ程の冷靜も見えない。『長袖、草履しげき秋宮人の月の宴、それ脆弱の古都にして、男子の群をこゝに見る』の悌なきにしも非ずである。

北陸道は加能越を初め、新潟かけて會員も隆盛である。然し、荒海や佐渡に横たふ天の川の慨見えず關西地方の影響が、言語に風俗にありて遂に第一回の變節者××、第二回の變節者△△と云ふ主魁を出した。男兒に逡巡狐疑は耻である。それが此地方に最も多い。高畠君、本保君の如きは蓋し稀有なるものであろう。

同じ日本海に面して更に進めば兩羽である。然し山形と秋田とは氣質がまるで異なる。秋田縣は北陸系を引いておつて、先年まで土佐が隨一であつた酒の密釀造者は今は秋田縣が日本一である。而して各家に六法全書を備へてる土地である。山形縣は貧富の差少なく遊學生の多いこと鹿兒島縣に次ぐ、維新前までは數多の小藩によりて分轄されてゐたので、鄕土に對する執着が強い。それが他に在りては團結心の堅固となる。今回の指定運動にも最後まで踏み止つたのは、兩羽初め東北人が多い。

維新の創業が南國の人々によつて爲されたと初めにいつたが、言訥にして行鈍に見ゆる東北人は歷史的には侵略され從服され、地理的には僻遠に位す。自然人後に隱れざるを得ない。されば表面

に現れなくとも、半年の奮鬪に中堅を以て重要視されたのは言ふまでもなかろう。

關東地方は喧嘩に早い。就中、茨木、千葉の一部がそうで群馬縣は所謂長脇刀の氣風が殘つてる。然し大勢を動かすに足る迄には行かぬらしい。東京府を中心として群馬埼玉縣には可なり人物も居つた今回の擧で栃木縣が最も多く醜類を出し、神奈川靜岡兩縣は尤も平凡であつた。

以上は人國記の總括であるが、最初に九州により烽火は上げられ關東之に和し、各縣人の簇立を見るに至つた。その經過中に各種の分子は陶冶され、九月開校を見る迄四百餘名の團結が會員の自發によりて、保たれる事は、卷頭縣人名簿に長く紀念となつて殘つたのである。(完)

都に殘れる友へ

餓鬼路

昨日鳴戸海峽の六時間は夢の間、夕陽が傾いたと思つて船室から覗いて見たら船は港の中でした『エンヤラコラサ』と妙に節付けた聲色、黑い節立つた腕を持つた水夫に太い綱が岸へ投げられたこれで四國の一角と關係した譯サ。下船したら小松島。

一昨晩は態々驛迄御見送下され有難ふ、汽車が動き出してから他の人は『左樣なら』『御機嫌宜う』とか『御無事で』とか云つて出來る丈情を(愛情、友情、眞情)表す爲に帽子を振つたりハンカチを振つて居るのに君の『少しく賢くなつて來い』には面食つたよ。

醒まされ勝の夏の夜の夢、ましてや汽車の三等數千の夢を乘せて、闇の中を、賢も愚も、美も醜も男も女も、長も幼も、富も貧も、黃人も白人も黑人も……皆同速力で走る、進む。汽車は一時に沼津に停りました。破れし夢にヒシ〳〵と別離の哀情を俱ふ、額は煤煙と汗と脂肪でニチヤ〳〵する、ただ驛舍の電燈が佗びしげにガラスからガラスに映て居る。沼津!!!沼津!!の聲に釣り込まれて涙がさしぐまれます。さしぐまれたまゝ淡い光を眺めて居たら、それからそれへと……

縣人會主任として後事を依托され乍ら歸鄉する不義理、友情や愛情から四十日餘り離れなければならぬ哀情の苦悶の爲に胸に込み上げた。七月廿九日の父よりの來信に曰く

『是迄久敷休校致しまだ其上夏休にも歸宅致さず候へども當方にては斯る馬鹿げた金子送附致す事相叶はず候間、縣人諸子には親が病氣とでも申述べ主任辭退の上卽刻歸鄉致す可く候』

純潔なれど願ふ可き筈の父が子に虛僞を强ひ、正義よりも金と云ふ親、そして子の愛に溺ばれて居る老父の無理解を思ふと益々胸が暗くなつた。手當り次弟に投げ出し度くなる、泣き度くも怒り出し度くもなつた。然し歸宅してからの父の顏を想像した時にバッタリと悄然ゲた。『親父は憤つて居るだらうなあ』『何と云つて辯解仕樣？』『正義を眞甲に振り翳して革命を起した僕だが、頑固の親金主の父(これは父の慣用語で、『貴樣は生意氣になつたぞ』と云ふ言葉の次に好むで父が使用する言である)と云ふ者には正義とか武士道、犧牲とかを千百竝べ立てゝも說明が出來まい』等思つて居る內に汽車は暗黑の裡を二點、四點、三點と光を拾つては捨て、捨てゝは拾つて走り繼けた。

昨夜は小松島の一旅舍にて宿泊。舊曆七夕樣で家々の軒には笹短冊で飾られて居た。旅の疲れで床に就かんとしたら女中共が遊びに來ました。

十時迄、まだ田舍芝居の柏子木がカチ〳〵と響く。

本日早朝歸宅、車上の三時間、山又山、搖られながら、父に對する辯解法、父の顏、村の人に遇ふ耻かしさ等を想像すると可成的車の遲着する事を願つた、遂に歸宅した。

案ずるよりも產むが安かつた。父も母も兄も妹も皆喜びの溢れる樣な顏をして居た。『よく歸つた』『汽車は無事であつたか？』『何時東京を立つた』と右からも左からも矢繼早の質問で返答に忙がしかつた。那麼嚴しい手紙を呉れた父は僕の顏が見たかつたのだらう。それにしても嬉しいと云ふよりも年毎に白髮が殖えて行く父が氣の毒に思へた。だが嵐の前の靜寂が想像されて氣味が惡い。

家內皆健全、殊に十五の妹は健全と云はんより

も頑健、肌脱ぎ湯を使つて居るのを見た、印度歸りと兄妹仲間で尊稱を頂戴して居る丈に隨分黑いそれでも白粉を塗つたら見違へる程よくなつた、女らしくなつて來た。歸來早々井戸から水を酌んでは庭木に撒けた、天日療法と稱して眞裸體になつて親父の前で流行唄を歌ひ乍ら庭掃除もした。妹達はクス〳〵笑つて居るが僕の元氣を承認しない譯には行かぬ。晝過頑健の妹に蜂の巢を六ッ許り取つて貰つて魚を釣りに出掛けた。卅尾程雜魚を釣つたら餌が盡きる、仕方がなく歸宅した。直ぐの妹は笑ひ乍ら見渡す所皆青、青い山、青い空青い水、青い田、青い畠、青い原、歌には餘り青過ぎる、田舍の天地は一切が理屈抜きだ、それは自然が證明して居る、否今日一日の僕の顏色の變化で說明して居る。

夕方隣人が

『御無事でお目出度ふ御座います……よくお歸りでした』と云つて香魚を五十尾餘り呉れた。

『東京の方の景氣は如何ですか?』

此質問は歸省する度毎に五六度は逢着する言葉である。

『何時御卒業ですか?』

『まだ是れからですよ』と逃げた。

『最う御診察はお上手になられたでせうネ』

私に取つては話が突飛から突飛に飛ぶ

『どうしまして』と又濁ごす隣人に取つて私の答は意外から意外に外れて行く。

『御冗談でせう……何所で御開業ですか』と遠慮して居ると見て取つた隣人は河岸を變へて大飛車に出る。

桂花君『文明人は結論と急ぐ』と、田舍の人も結論を急ぐ、結論から結論へ、突飛とは結論を意味す。正義と絶叫し、勝利を高唱するのも僕達である、それと同時に寄る可き學校のない浪人も我等でなくてはならぬ。正義を唱へ、勝利を歌ふには是非「天下の浪人である、私は乞食である』と告白した後であらねばならぬ。

結論の方向に話す人と遠ざからんとする者との會話には摩擦が生ずる、澁滯がある。其人は物足りなげな顏をして歸つて行く、僕の腋窩は冷汗で

ビショ濡れ。父は初めから終り迄苦い顏して（時には苦笑した、然し其笑も結局は苦と云ふ字が付いて居る）聞いて居た。

磯部引退、廢校、學生後援會、休暇、新校設立認定、指定と我等四百餘名も結論を急いだ。急ぐ身と急がる身、待つ身と待たるる身、『待たる身となつても待つ身になるな』と云ふが、待たるゝ身も隨分辛いよ。

夕食の時腫物にメスが來た。今朝安心は矢張嵐の前の靜寂に過ぎなかつた、嵐の前の恐怖の狀態は僕の日誌の七月廿九日に這う書いてある。

『……打ちつける樣なシブキが硝子戸に白く散る、散つて流るる雨だれの中に窓を洩れた電燈が赤くうねつて流れて行く、怒濤の樣に泳いだ谷中日暮里駒込の林も森も夜の恐怖に包まれて深い〳〵遠方近方の唸聲に止めた。暫く靜つた嵐は前の林に吸ひ込まれた程靜寂だ、蟲の音は林が、嵐が吐息する度毎にジク〳〵と薄れて行く恁麼した靜寂は物凄い程である、來る可き嵐の强さを想像して女達は襟を合せた。窪地を隔てゝ前も横も林だ、寺だ、そうだ墓場だ……

跡絶つゝ鳴く虫の聲も、物思ひに沈んだ林の吐息もひつたくる樣にして嵐が若い女達に林の吐息を投げつけた。『吁々』と叫び解を立てた女達は互に膝をつきつけ恐怖に戰慄いた。上野の森から捲き起した嵐は谷中の杜は吹き込んで遠く〳〵駒込の方へ飛び去つた……

桂花君、これは一週間ばかし前の洪水の日の文の一節だ、丁度僕は今、恁麼狀態にある。隣人と云ふ嵐は去つた。夕食迄の間が嵐の靜寂である、然し先刻の會話を聞いてから以來の父の顏の雲の祖徠で來る可き嵐の恐怖が想像される。

『お前も詰らん學校へ入學したもんだネ』

『ハイ』と辭優しく柳に風と逃げる。

『騷動なんか起して……千里の道も一里行つたかと思へばお父さんも嬉しいが……一里どころかお前これから行けるか行けんか判らん。今迄お前に送金するのは全然大橋から金を束にして川に投げ込む樣に思はれた』と前の嵐が手ごたえなかつたので今度は吹き揉み吹き千切る可く襲來した。

『學校が惡かつたんですから仕方がありません』

『那麼學校へ入學したのが惡い、好い學校は他に多くさんあるよ』と少し手がかりが出來たのでの

しかゝつて來た。

『でも騷動〳〵とおつしやるが金で買はれない好い經驗をしましたよ。『若い時の苦勞は買うていもせい』と云ふ言があります。……失敗は成功の基ですからネ』と苦しさのまぎれに無茶苦茶にはね返した。

『苦勞も苦勞によるよ』と重く深く來た。

桂花君、我等は『正義に奮起し、正義に邁進し、正義に終結せん』と萬人に表明し、社會に呼號した。それが肉親の父に正義の擧を誇つてよいのかはた謝罪しなければならないのか判らない。社會に宣する言葉と父に話す言葉と二通りに使ひ別けをしなければならぬ時代に生まれた青年は實に苦しい、人間の終局は死である、墳墓であると知つたら恁麼に迄終局を急ぐまいものを。

恁麼時には父の爲に、僕等の爲に漱石先生の猫の言を引用したくなる。曰く、

『好い智慧が出ない時は、そんな事は起る氣遣ないと決めるのが一番安心を得る近道だ。昨日貰つた花嫁が今日死なんとも限らないが聳殿は玉椿八千代も等と目出度事を並べて心配らしい顏もせんではないが、心配せんのは、心配する價値がないからではない、いくら心配したつて法がつかないからである』

舊八日の月は空高く澄んで居る、蟲はたえず鳴く、兄と弟は前の涼臺で線香花火をやつて居る。火が吐息する樣な東京の夜に思ひ較べても在京の諸兄の困難が思ひやられる。お諏訪樣の大祭迄には是非上京する考だ、山車やお神樂を見たいのではない早く君と語り度い爲ば。上文を讀んだ君は少くとも理屈ぽい君は、前半と後半の文章の差異をせめるだらう。それは僕の刻々と氣分の變化を示したものと思て戴き度い。後援會委員の諸君によろしく。學校の經過も時には知らして呉れ給へ世間も大部靜になつたからこれで筆を擱く、乍末文貴兄の健康を祈る。

（五、八、五）

浮世の外から

迫田四五六

六月十五日の朝であつた鈴本亭會合の席上で突然舊四年中の或一部の者が團結を破つて受驗すると云ふ報告があつた。其氏名は曰く瓜生、奥川、花村、山田、關基等十七八名である。然も彼等は皆磯部攻擊の急先鋒として奮鬪した大立物共なのだ、處が利に走り已を益し義を棄て道を躙蹂するに何等躊躇せざる彼等は、何時の間にか敵に降り其膝下に低頭するに至たのだ。是を聞いた一同が、切齒扼腕悲憤慷慨其極に達したのも無理なき事である。男兒か一度誓ひ血と涙を以て築きし清き團結を破り、正義に背きし其罪赦す可らず、生して置くな宜敷しく葬去れと叫ぶのも當然である。而も義の威光に恥ぢてか恐れてか、病院の一室に警官護衛での籠城振りは餘所目にも氣の毒の至り、斯樣な試驗は前古未曾有怒らく未來永刦あるまい、未開國の蠻地にて觀そうな現象で帝都の眞中で大正の聖代に行れ得べき事でない、寧ろ滑稽な話だ彼等は正義には背いたが法律には反しない、若し吾々に何とでもする者があつたならば其等の首は早速飛ぶであらうと、大意張の體だ。全く人面獸心と云ふより外ない。十八名の中に余の同縣人某が有る事を聞た余は全く驚嘆し憤慨した。そして同縣人二十七名は早速打連立て其等の宿舍たる病院を訪ひ、某に會見し大いに意見の交換をやらうと云ふ事になつた。一同が連立つて行つて見ると全く報告通りである。彼等は二階に陣取つて何やら談笑して居る、多分已の不德義の手柄話を誇り合ふのだろう、余は思はず激昂した、立關には理事の吾妻某番人の役目おさおさ怠りない、警官四名は物々しく警戒して居る、殺氣は既に漲つた、縣人を代表して森君と余とが某氏會見の役を仰せつかつた、其責任の重大なる勿論である。早速談判は始つた。余『學生が居ますか』吾妻『誰も居ないよ』余『二階に居る筈です、私は某に是非面會したい事がありますからちよつて呼んで下さい』吾妻『居ない居ない學校に行つて聞け』、余『居るのに居ないとは何んです』吾妻『此處に來るんちや

ない向へ行け』辭は既に荒かつた、仕方がないので其場は去つたが、早くも余の談判が奴等に聞えたとみえて二階を右往左往し、窓から顏を交々出して是見よがしに見下して居る。花村泉と云ふ壯士俳優の出來損こないの如き名のあの鮑髭を捻つて見せる其樣の憎らしさ、余は遂に憤慨其極に達し前後を辨ずる間もなく二階に馳上つた。勿論森君も後について居た、廊下には關基等數名の者窓より見下し、後に殘つた縣人の樣子をうかがつて居る。余が彼等の後に立つても尙ほ氣付かざる程其程熱心だ。余はいきなり『何して居る』と大喝一聲直ちに鐵拳一本をくらわした、彼等は不意打にびつくり仰天何處ともなく逃去つた。此一幕と共に余の心神は統一を缺いてしまつた。然し室に飛入つた時に十數名の者共が寢轉んで余を嘲笑して居た樣の憎らしかつた事は、一生忘れまい。余は某に要件を述べ余の後に來れと命じ室を出る時、其等の中の大將然として寢臺の上に立つて居た瓜生に向ひ何やら嚇文句を竝べて立退つた。事件は此迄である僅か此間數分を要しない、其が家屋侵入とか、脅喝とか、毆打とかの名で警察に引張られ檢事局護送となり遂ひに裁判となると云ふ余の一生涯を通じて、又とあるまじき經驗を得るに至つた。問題とならんとは豫期しなかつた。之れも僕等を社會主義者か暴民の如く警視廳に上申してゐた△△等の奸策だ。駒込警察で種々取調べた上直ちに留置場に入れられた。纔に二疊敷位の暗室の樣な板間に、先客四名が小さくなつて蹲つて居る。蚊と蚤と虱の攻擊は早速始つた、其に蒸暑さと異樣の臭氣が一緒になつて攻立る、夜の十二時頃森がひよつと姿を現し他の室に入れられた、勿論話は出來ないが同罪で調べられたのだらう。夜が明ると友人達が來訪して色々面倒見てくれた、辨當の差入から紙手拭小使金迄置てくれた。實は前夜夕飯を食べないので蕎麥を注文するに僅か六錢しか持たないので、カケソバ二を食べたのみなのだ。友達は全く有難いものである、丁度三日目の朝警官が余等に向ひ、本日警視廳に送るから仕度せよと命じた。其時既に外には喧しい戰鬪艦の音が聞く(囚人が護送の自轉車を呼ぶ別名)早速手

錠は箝られ繩は掛けられた、まるで重罪犯人扱ひである。產れて始めて自動車乘だが餘り氣持の良いものでもない、唯森君と顏を合したのが何んとなく嬉しい、話が出來ないので眼で『トウトウヤラレタネ』と合圖すると、何か意味ありげな眼付した。警視廳で取調べの上直に檢事局に送られた檢事は嚴肅な態度で暫く調べられたが、今日は歸宅してよいと云ふ赦を得た。二人の喜びつたらない、久々振話の出來る身となつたのだ、然し其後二三日間は色々取調べを受けた。瓜生も關も調べられた。相變らず警官護衛での出頭である。最後の廿日になつて檢事は余に向ひ、君は之から監獄に送ると云つて側の電鈴を鳴したが、つかつかと來た監手は直ちに警視廳に護送したのである。此處では正式に指紋の相書寫眞をとられた。留置場は可なり廣い、然し外觀の堂々たる洋館に似ず半地下室の陰氣な室だ、同室人七名皆人相の惡い奴ばかしである。余を始めは惰落書生位に考へて居たらしかつたが、段々事件を知り新聞記事など想起して大いに尊敬するに至つた、五百の親分と思惟したらしい、此處の二日間の生活がすむと愈法廷に立つ日は來た、多くの罪人と珠數繫ぎになり簑傘冠つた姿は可笑とも情ないとも云はれない。同僚諸兄が成行如何にと居列らばれた樣を見た時は、流石に五尺有半の此男も泣いた。嚴しい法官の前に立つと既に身は凍つてしもう。此日は裁判長の尋問あつて、愈々東京監獄收監と云ふ事になつた。獄屋生活の事は餘り多くを云ふ事を憚るけれども、第一に着物は青い物に着換させられ、胸に番號をつけられた。余は四五六だ、之が余の姓名の代理をつとめる。室は三疊敷の獨居房で中々頑丈に出來て居る、然し便所もあれば臺所兼洗面所と云つた樣な處もある、高い處に鐵窓があつて微かに室を明くしてくれて、例の男三郎を泣かした事も思れる。夜八時の就寢に朝五時の起床其に三度の食事と二十分の運動の外、何等なす事はない、唯面會人があれば其に五分間の談話を赦される、其が何より嬉しく何よりの慰藉となつた。然したつた五分間では何から先に聞いてよいか何を後に話すべきか甚だ物足りない、辯護士の方や小

野君山本君等多くの友達が幾度も來訪された、此等の人には團結の如何は何より先に聞た事である其の時の余の頭には其より外に何者もなかつたのであつた。其でも冷き鐵窓の下に頭をつけて寢についた時、遙か遠く汽笛の音聞ては、思を故郷に走らせ枕を潤した事もあつた。又豆腐屋の笛は『もう食事前だな』と大低の時聞の見當をつける滑稽もあつた。友達が差入てくれた書は直ちに讀盡し廣告迄讀んだ、其れでも尙ほ淋いので塵紙で紙細工などして暮した事もある、嘗て板垣伯が叫んで『板垣死すとも自由は死せず』の句を考出して、『迫田縛らるとも正義は縛すべからず』などと眞似して、何か大發見した樣に獨りで喜び獨りで痛快がつた事もある。斯くして何日かの獄屋生活を續けた其間に、三度法廷に立つた檢事が刑六ケ月を要求し一年の執行猶豫の論告があつた時は、流石に肺肝を刳られる樣な氣持がした。それでも無事に務を卒へて出監の夜、知己友人や各團體の代表者の七八十名が出迎へられ、厚き握手の禮をされた時の愉快は到底余の拙筆につくされない。斯くして余は再び靑天白日の身となつたのである。此間幾多の痛苦もあり、悲慘もあつた。然し一生又と得られぬ修養をなし經驗を得たのは。何より嬉しい、余の兄なんか反つて羨しがつて居る。

最後に記したいのは、斯く多くの人の反感を買ひ、正義を棄て、惡黨に組した瓜生、奥川等は遂に醫術開業試驗には合格しなかつたそうだ。瓜生は裁判長の尋問に答へて曰く、私は早く醫者になつて負債を返すのだと、云つたが其譯にゆくまい可愛想に。

追憶

梶谷馨

『兄さんが、こんな立場だつたら、腹を切つて呉れますか？』讀み終つた新聞を、下に置いて、突然尊れたが、

『さうだなあ……』と、考えたきり、兄は何とも云はなかつた。それは丁度、東京日日新聞が、波津久兄の御尊父の、死を傳へた六月十八日、雨上りの空に、雲行が、亂れて、蒸し暑い夕方であつた。

正を叫び、義を唱へ、惡鬼と戰ひつゝ五十日余、來し方を顧れば、怒濤逆卷きて、海若の狂ふが如く、前途は、萬里遙かにして、

星の光の、それすらも見えない時、ひきつゞいて來た、此の悲報は、如何に、四百の吾々を、興奮させたらう。

より深く、刻み込まれる、悲憤と、慷慨の念は、只に、自分達の、胸に於て、のみではなかつたのか、兄は、その時こんな事も、云つた。

此間は、警視廳へ、引かれたつて人もあるさうだし、又、こんな悲慘な事件も、あるのだから、卑怯な眞似は、決してするな。たとひ、この儘、醫者にはなれなくつても、故郷への言譯は、俺がしてやる。

と、勵した態度の眞面目さが、恐ろしい位だつた。

元より、人に、敎えられる迄もない、共に奮い起つてから、曾つて動搖した、事とてもなく、名を恥ぢ、義を慕ふ心は、四百の諸兄に、劣らぬものと信じ乍ら、ともすれば、誤られ易い無口な自分達は、不甲斐無いと知りつゝも『不言實行』の四字を、心を慰安するせめての、言葉として、何日かは此決心を、示し合ふ日が來るであらうと、よしない、賴みを、たよりに、十日は暮し、廿日が迄り、若葉の露も馨る、六月に入つて、半ともなつた。その十五日の、暮方に、突然、自分達の心は、新紙の數行の文字に、驚かされた。

『健兒の意氣の發露』これ位い痛快だ、と考へた事は、なかつたが、それも一瞬時に消え、續いて起る、いろんな連想が、次第に、不安の色を、濃くして行つた。

殊に、其夜は、生溫い南風が、植込の木木を騷がして、氣味惡く、東都の空は更け沈み、不吉な前兆ではないかとさへ、思はれでならなかつた。

それから、二日ばかり後なのだまだ、その不安の念の、晴れ切らない間に、九州の波津久君の御尊父の自刄が涙をもたらせて、傳はつた。

幾度か誤りだらうかとも、考へたが、愈々、事實と知つた時、鋭い針に、胸を貫かれた感のあつたのは、敢て自分一人ではなかつたであらう。

命を捨てゝも、とは人のよく放つ言であつても、行ふに難い此事、惜しい命を、正義の爲とは云へ散る花露と、競はれし心、その心に、はぐくまれた人の胸中は、偶ぶにさへも苦しかつた。築紫の山の、山時鳥の、血に啼く聲は繁かつたらう。

男子の意氣地に、鐵窓冷たく、つれなき夢を結ばる君と、歸らぬ旅路に、父上と別れて、紅涙に袖濡らるゝ君。

この二つの犧牲は、種類こそ異れ、その源は一つ、偶ぶも同じ血汐の色の涙であつた。その大なれば大なる程、自分たちの、形體的に現はれさふもない決心が、見すぼらしく、貧弱に思はれてならなかつた、と。同時に、興奮した自分達の後を擁して居る人人の胸にも、偉大なる何物かを打ち込んで、深刻な同情は沸き、やがてはそれがある決心と姿を變へて行つた。

悲しみ深い骨肉の間柄も、全然、別人かと疑はれる迄、眞面目に勵されたのも、その決心と同情に依るに他ならないのは、明な事であつた。

四百名餘の者は、斯ふした中にもまれて居たけれども、自分たちに關係のない世の多くの人は、海に、山に、眞夏を遊け、歡樂

の夢を追つて、走つた。その傾りさへ皮肉な面當（ツラアテ）と、思はれる位、純な心も荒んで居た。苦しい境遇にいぢけて來た。しかし、遂に日夜、諸兄の東奔西走を意味あらしめた時の微笑は、炎暑の候を、戰ひ通した、九月中旬、隅田河畔の勝利の宴の杯に、浮んだ。

凋落の秋も、淋しく暮れて行く今　靜に思ひ廻らせば、過去半ケ年の夢は、思ひ出多い、痛ましいものである。

別けても、いろんなヒンテルケルンドの前に、繰り擴げらるる追憶の中の、この二頁（ページ）は、今なほ涙に濕つて、鮮な印象を止めて居る。

駒より牛に（日記より）

左武郎

日記を讀み返して見ると恐しいやうな悲いやうな狂人じみた生活の後が忍ばれる。今日は立太子祝典である昨年の今月十一日は卽位の大典があつて已に一年となる。

大典より小典迄の一循環、三百六十五日、この間が我々四百名の悲慘な生活の時間である。思ふだけでも戰慄するやうな過去が浮んで來る、これを忠實に系統的に書くには既に熱が失せてしまつた、私としては事件對自己の立場から記して見ることにする。第一回の公開演說の時、大町桂月先生から模範ストライキと賞讚され、私も紛擾などと言はず模範ストライキと呼ぶことにする。思ふだけでも毛穴が立つやうなあの五月六月當時の有樣を、すべて新らしい過去といふ陰影、勝利の歡喜といふ背景にかくして、これを美化しこれを考へて見たくもなることもある。この筆法から手帳の走り書き日記帳古手紙などを辿つて、私自身として特に心に殘つて居ることのみ斷片的に記すことにする。

駒込にある前校日醫校は今もこのペンを走らせて居るこの日暮里高臺から、眼下に見えて居る——昔の學校といふ感があるのみで何の印象もない。があの校舍で泣いたり指を切つたりしたことを思ふと馬鹿〳〵しくもなる、又我々四百名が振り捨てた學校に、今更新しく入學した人々のあることを思ふと、何となく世の中の矛盾が思はる。敢て校舍などに對しては今更憎惡の念も起らないが、自分等が通つた當時からの雨ざらしの半築の建物は相變らず裸體で雨ざらしになつて居る。新校の假教場たる物理學校は牛込にある、近々新築の校舍に移る迄借家住居の客である、卽ち駒込から牛込に假つたのである、牛から牛に移り換へたわけである、住むべき家に雨が漏り雨の漏らない家に入れはこれが借住居である、或友人は『假の宿とは言ひながら、駒から牛に乘り代へて、のろくも確く牛に引かれて善行寺參り』と、言つたこの儘を拜借して『駒から牛に』と題名した。さて善行寺は新校舍の建つべき地である、こゝに我々は孜々として勉めこゝに始めて往生すべきである。この生活が過去一年間我々の悲慘の記憶となつたのである。

× + × × ×

大正四年四月十五日

とにかく入學許可となり嬉しかつた。重荷をおろしたやうにが

つかりして、緊張して居た心はグット緩んでしまつた。こんなに人間の心は變化するものかと獨り驚いた。早速家に歸つたら家人の喜びは豫想以上だつた。

學校には入つたが十一日學監なる人の態度學校の不規律には少からず悲觀した。十一日の授業振など中學出たばかりのせいか驚き且悲しくなつた。授業料を納めなかつたなら止めたのだ、しかし本日T教授の訓話に依つて思ひ直した、學校では校舍を始めすべて九月迄に完成するといふ、思ひ直して自分等は大いに奮起せねばならない、日醫校の將來は自分等の双肩にあるのだ、奮起すべきだ逆境に逢ふに又逆境を以つてして始めて人間になれるのだ。

これが入學八日目の日記である。今日の結果を思ふにつけ當時が忍ばれる、又磯部氏の横暴の後が思はれる。我々は耐へ得るだけは忍んだのである。

學校の內情を知つてからは通學するにも元氣がなく、磯部學監の訓話など聽く時は、その矛盾彼の厚顏を憤り何故かゝる僞教育者の所から奮然離れないかと已の弱きを攻めた。當時解剖室の標本には差押への札が貼られ、新築の細菌學教室は落成はしたが借金のため戶が開かず、病院は二重三重抵當に入りその不仕體は思ふてもゾク〳〵する。

大正五年二月五日

頁報なし。

入學後半喜半憂一日として樂しき日なく、學校を愛して且之を斥け、常に不安の境に陷るなり。十二月十八日の夜、我々四百の青年の半ば勢力を殺ぐは卽ち磯部なる僞教育者山師の存在するがためなり。彼を排斥すべく血判狀作製の際、第三位に押印なせしを記憶す、壯なれども又悲し、而して今肯彼のもとに學ぶの矛盾や如何。

當時私は指定實行委員に擧げられ隔日位に委員會あり、而して多くは委員は磯部に買收され、何の得る所もなかつた。當時余の部間には『强以吉語答双親。何知胸中百憂集』の句を揭げた。

御書狀數々拜見仕り候昨日天谷校長の名に依り退學の通知有之候事件の經過は新聞等にて詳細承知我々父兄としては憂慮に耐ずへ候へ共事斯に至りては已に致し方なし今後の方針を定め一身の安定を期すべく努力すべきは勿論なれども必ず前便の決心は實行せらるべし男子一度指を切つて起つこれに反くが如きこと決してあるべからず兎に角來る二十三日公開演說を聽取致すべく明日出京致すべく候間同日は在宅致すべく候

御身の一身上に就ては常に余は辯護の地位に有り其苦心も一層に候兎に角父上と熟と相談あるべし

兄よりこの書狀を手にして始めて退學されたことを知つた。五月一日以來一晩として滿足に眠つたことがなく、湯に行く暇さへなかつた。晝飯と夕食とを家で食べたことがなく、夜一時二時に歸り朝の七時集合は實に苦しかつた。一日ゆつくり寢たいと提案を出して冷笑の中に否決されたこともあつた。根津神社に集合して磯部氏宅の前を通り旗を立てゝ文部省に押容せ多數の巡査と格鬪したのも、このころであつた

五月十五日

學校を愛する者は退學さるゝなり思へば過去一ヶ年間牛信牛疑を以つて在學し本日退學の運に合ふ而も少しも落膽悲觀なきは勿論むしろ重荷をおろせるの感ありて心地よし入學以來常に學校前途を祈り又危み又憂え實に悲觀せしこともありき就中厭ふべき磯部の下に學ぶの不快思へば本日これにあふ悲しみ毛頭なしなし

唯父母を欺き又憂へしめ之がため心血をしぼりし多額の費用を空しく徒費せしを悲しむのみしかしこの悲痛に遇ふ無形の報酬を得し大なり而して醫學の一般は何事をなすにも必要なればなり

いざ彼校を破壞し盡して磯部を葬りて歸國し野に耕さむただ故山の老母近隣の正直者人共我が嶽醫者として歸るを待つの期待に反するの苦しきあゝこれあるのみ!! 之のみ!!

廢校のただこれのみを願ふなるこあごろの我悲しからめや

夜一時半ごろ王子警察分署から四度目の出頭報告が來た、この當時度々高等係とかいふ薄氣味の惡い刑事が出入した、終には知人のやうになつてしまつた、用もなく冗談を言つたり、頭痛の療法を敎へてくれなどゝ云ひ最後にはいつも『學校の方は如何です』などと要領も得ないことをいつては歸つた、このごろはむやみに警察の干渉が嚴しかつた

七月一日

示達の件

明二日午前六時日本醫專校ノ件ニ關シ本郷本富士警察署ヘ出頭可有之候但出頭ノ際ハ此書面持參アリタシ

もうこんな紙片は反應がなくなつた、

七月四日の日記には『五人の尊ぶべき救濟主見ゆ』とあるこの日秋先生他五先生が始めて見へられ愈前途に光を握り學校側の策に掛らぬやうにと萬事を五先生に依賴して大部分の學生は歸國し自分は縣人會主任を拜命して本部と歸國者との連絡係として殘つた主任として歸國者への通信は百通に近かつた。その一通を記して見る

八月十二日　S君より

拜啓度々通信被下感謝に不堪候君にも御祖父御逝去の由御愁傷の至りに候

扨て兄よりの御依賴早速承知致されば相ならず候へ共今迄何も申さず居り候しが小春今春前橋に養子に參り候も此度の學校問題のために面目なきこと有之目下里に歸り居り次第に候樣にて日々兩家に於て人を介して交渉中にて未だ何とも形が附かず小家生只今を留守に致し候ては困却致すことに御座候いづれ今月形中にはが附く事と思ひ居り候……の度の件は小生一身上の事にて尙先日の入學保證金とても先方よりは無論出して呉れ申さず實家にては怒りきつた實兄は出して呉れず止むを得ず義兄に借用致し納附せし樣の次第にて候この問題の解決せざる以上は學校とても入學出來得るや否や疑問に候此分にては養子は離緣となり實家に於ては非常に立腹にて學校も六つか敷樣に見受け申し候而して義　に向一ヶ年ん借用致して新たに入學致すやうに獨り定め居り候間幾分望をつなぎ居り候……（下略）

事件の裏面にはこんな悲劇もあつた私は祖父が死し日を經ず又一

人の叔父が死んだ。しかし主任としての事務もあり直ぐに歸れなかつた度。實家からは半ケ年振つ歸國を迫られた。母からは事件のため身體を惡くしたらう、早く家に歸つて靜養せよ等と、涙の出るやうな手紙も來た、父が上京の折私の瘠せたのを心配して家に語つたので、弟や妹は毎日歸國を迫つて來た。度々言ひわけの手紙を送つた。

やがて萬事をN君に依托して。歸國した學校問題に關しては家人は豫想以上冷靜で、私の健康狀態を見て母は喜んだ、父も太つたと言つた。

九月十一日　開校式

今日よりは新しく生くと誓ひてし已が心のあらたまるなり

今日の日を忘れずありて永久にかたき心をもちて卒へなむ

こんな歌が手帳の隅に書いてある。唯この日の心地を忠實に語つて居るから記して見た。そしてこの日は向島サツポロビ！ル園に學生懇親會があり、皆新しい生活に生きんとし新校の前途を祝した。駒から牛へ乘り移る迄にこんな色々の歷史ある紛擾の裏面を私記として書いた。當時の熱は何處かへ去つて悉く之を淡化し、美化してしまつた。そして吾々は遲くとも確い牛の歩みを續けつゝあるのだ』（五、十一、六）

吾等の歩みと現代人士の胃の腑

高澤千里

自我と、自由と向上と、が束縛と、制止とで、沒個性化せられた、我々は慘めな捕虜として、いつまでも、冷靜と、沈默とを、守つて居つては價値ある我々の、前途に、大きい暗影を齎らすのを、自覺した時に、我々の憤怒は、單なる憤怒と言ふよりも、義憤となり、根底よりの改革と、刷新との必要上、飽くまで協力して、彼れ寄生虫を、撲滅すると云ふ堅實なる步調で、終いに武裝した。

今更ながら、我々の古巢乃至は、遺骸である處を、痛罵し毒矢を發しても、詮なき事だが、過去の戰爭史とし、且つは滔たる風俗生活に、停滯無爲にて、肉的、動的、安逸を追求して誇り顏なる、相當の地位と名譽とある人の鼻柱を碎き、彼れ等の胃の腑を御目にかけたい。

折角、教育事業と云ふ名を藉りて、見事な手段で、法を潜つたり、約條に背いたり、學生を胡覽化して、私腹を肥し、破鍋にとぢ蓋の樣な事をやつたつて、ついには、顧く時がくる、頽壞の秋も必ずやつてくる事を知らなかつたのか。

我々は、不義不理を學び度くない、春刻價千金、最も貴重な時に、かゝる至極危險な、そして怠慢な人のもとに、教化せらるゝ事を欲しない。

もう彼れに對して、あらゆる要求も、意志も少しの効果を認めなかつた時、我々は丁度初夏の五月一日、上野の山も、日比谷の森も、新しい、そして香ばしい、芽をふき出す時、不忍池の水が溫みかけた時、斷乎として從來屢々なした樣な、宛然飯上の蠅を拂ふ如き、常套手段をやめて、最も鋭き劍を手にし、胃をつけた。

タゴールの『汝捨てなば得べし』だ吾々は、決して二度と學校

に踵を返さない、矢のつきて、一敗地に塗れるまで、戰ふと云ふ決心で始まつた。

學生保證人と、學生と、これが一團となり、社會一部の同情者と、一隊を成して行進した。

我々は我々の立脚點を明にし、且つは日本醫專の主權者である可き彼れ悖德漢を葬る可く、隨分社會に向つて咆哮した。この苦心中にあつても、時に我々の步調に少數の不具者を出したけれど終始一貫して進軍した、この精鋭な、猛夏雄の行動と、奮進とを誰れか驚きの目を以て睛ぬ者はなかろう。

されど、我々の心の叫と、やる瀨なき涙の痕と、指の瘡痕とは未來永劫の記念となる可き、價値あるものである、吾々は終いに生命の復興となり、再びこの城に依り心靜に學窓にあり得るは決して偶然ではない、吾々の救濟者であり、親父であり、慈母である所の五名士と佐藤先生とは、實に暗夜の光である。

かくしたる、この生混唯一の行動に對して、少なくも社會に地位と名譽とある人が隨分苛酷で、只智の人にして情の人でなく、表裏の著しき差異あるを知つた。

彼等の胃の腑を見よ、もう腐敗に腐敗して、惡臭を放つて殆んど其の用を辨ぜぬ、それ故に我々があの樣に涙を呑んで事の次第を闡明しても、一向嚥下することが出來ん、まして消化することは尙ほ出來んのだ。物的顯榮にのみ憧れてゐる彼等は、正義の聲さへ聞こえん可憐者だ。

且又彼等の目玉は凍つてゐる、唯物的繁實文明の中に、徒に佇立して空しく顯榮にのみ眩み、權門に媚び、巳が官位の向上をのみ望みつゝある彼等は、彼等の眼前に教育界のかゝる缺陷と、矛盾との炎々たる炬火ありしを見えざりしか。

國家に一段の價値と、權威とを附與する現教育界の改善をさへ衷心なすの意志なきを見ても、俗惡層淺な彼等の胃の腑が、那邊より滋養を受けつゝあるか推察する時、我々は熱心に、且つ深刻に、醜い穢い、現代人士の胃の腑に、呪と、嘲とをもつて、土砂を投げこんでやるより外に、道のないのを悲む。(五、一〇、三〇)

會報

謝恩辭

先生の我等學生を董陶せられしこと茲に年あり顧みれば我等が日本醫學專門學校を連袂退校して東京醫學講習所に入學するに際して先生も相携へて同校を辭し本所に醫化學の講義を擔當せられぬ、學生一同は之を德とし深甚なる感謝を捧ぐる者なり。然るに今や先生職を辭して去らる、訣別悲哀はさること乍ら我等は先生の將來を祝福して止まざるなり、此の銀盃、赤誠を以て聊か舊恩に謝せんとする